

慢性咳嗽の鑑別診断における気管支拡張薬の比較検討

渡邊直人¹⁾、中川武正²⁾

城西国際大学薬学部薬理学講座¹⁾

白浜町国民健康保険直営川添診療所²⁾

【目的】慢性咳嗽の鑑別診断には気管支拡張薬での効果判定が重要であるが、その種類や有効とする判定基準については定かでない。長時間作用性 β 刺激薬の吸入と経口薬に貼付薬を加え、それらの有用性と安全性を比較し鑑別診断に適した試薬を検討した。

【対象】咳嗽持続患者34名をサルメテロール(SLM)群11名と塩酸プロカテロール(PH)群10名とツロブテロール(TBR)群13名に分けた。

【方法】SLMとPHは1回50 μ gを1日2回投与、TBRは1日2mgを貼付し、投与1週間の咳日誌に記載された咳点数で評価し有効性と副作用を検討した。
自己の臨床経験により咳点数が2/3未満に減少した者を有効と判断した。

【結果】有効症例は、SLM群：9例(咳喘息(CVA)3例、気管支喘息(BA)3例、風邪症候群後咳嗽(CC)2例、マイコプラズマ気管支炎(Myc)1例)、PH群：6例(CVA4例、BA1例、CC1例)、TBR群：9例(CVA6例、心因性咳嗽(PC)2例、Myc1例)であった。3群のいずれも無効症例は非喘息疾患であった。PH群の50%、TBR群の38.5%に副作用が認められた。

【考察】いずれの剤形も鑑別診断に有用であるが、 β 刺激薬により咳嗽が軽減する疾患にCCやPCが存在することに今後は注意を要すべきである。
一方、SLMはPHやTBRより安全性が高く、吸入療法が適切に行えれば診断的治療薬として最適と考えられる。